



ふれあいと 対話が築く 明るい社会

# しほれん

第 29 号 2025. 11



青葉山公園 仙臺緑彩館前 初代伊達政宗騎馬像

【昭和100年 「昭和・平成・令和の変化」】

## 仙台市保護司会連絡協議会

## 巻頭言

「昭和100年」保護司制度・社明活動の基本理念  
仙台市保護司会連絡協議会会長……………小野 和徳 1

## 特別寄稿

昭和と平成と令和の保護観察処遇を「ざっくり」語る  
仙台保護観察所長……………田代 晶子 2  
古い常識から新しい常識へ  
医療法人東北会東北会病院理事長……………石川 達 3  
待つ力  
仙台市青葉区長……………谷田 至史 4

## 教育界から

「母」  
元仙台市立原町小学校長……………遠藤 和彦 5  
自然体験活動の有益性  
オーエンス泉岳自然ふれあい館館長……………熊谷 祐彦 6  
不登校支援の今とこれから―地域とともに歩むフリースクール  
フリードールだいと 塾と長崎高等学院代表……………石川 昌征 7

## 子育ての分野から

変わらないものゝ可能性は無限大  
児童館館長……………佐々木康之 8  
「昭和100年」昭和・平成・令和の変化  
南材木町児童館館長……………小池 正弘 9  
令和のおやじの会は何をもたらすのか  
仙台市立富沢中学校父親の会会長……………後藤 篤志 10

## 調査・処遇の分野から

使わない方が楽に生きられる、を目指して  
特定非営利活動法人 仙台タルク・グループアロー萌木施設長  
……………小野 精華 11  
ダルクを出てから  
……………堀井 正美 12

## 相談機関から

ありのまま舍での経験を通して思うこと  
社会福祉法人ありのまま舍 理事長……………白江 浩 13  
少年非行の現状  
泉警察署長……………西條 博文 14

ともに歩む存在として

宮城県就労・定着ネットワーク事業リ・トライ―  
認定NPO法人Spitch代表理事／保護司……………今野純太郎 15

## 関係機関から

見守り、支え、繋がり続けて  
こども若者相談支援センター所長……………小池 健治 16

## エッセイ

昭和100年を迎えて  
(公社)理事・みやぎ被害者支援センター  
シンガー・ソングライター／保護司……………さとう宗幸 17  
今も生きるノムラの教え  
tbc東北放送アナウンサー……………守屋 周 18

## 地区だより

青葉地区  
一生涯、学べる今に感謝……………石川 實玄 19

しみじみ思うこと……………渡辺 俊子 19

## 宮城野地区

病と登山と更生保護……………相原八重子 20  
昭和30年頃の農家の生活……………色川まさ子 21

## 若林地区

昭和100年と、一羽の白鳥……………小高 愛子 21  
「寄り添い、支え続ける保護司として」……………三浦奈名美 21

## 太白地区

オペラと日進月歩……………佐藤トヨ子 22  
趣味Ⅱ仕事……………小金澤綾子 22

## 泉地区

「昭和100年」昭和・平成・令和の変化……………秋葉 賢也 23  
人との出会い……………水野 修二 23

## 私の主張

令和7年度「少年の主張」仙台市大会 優秀作品紹介  
「私が歌う先にあるもの」  
宮城教育大学附属中学校3年……………菅原 琥千 25

「キャンサーギフトの母が教えてくれたこと」  
仙台市立鶴ヶ谷中学校3年……………佐藤 克樹 26

「Until we are all equal」  
宮城県仙台二華中学校3年……………早坂 翠 27

「見えないもの」  
仙台市立愛宕中学校3年……………岩本 侑奈 28

「夢を失っても」  
仙台市立寺岡中学校3年……………フェイガン瑠輝奈 29

## 編集後記

「昭和100年」の出来事  
編集副委員長……………谷口あゆみ 32

## 保護司信条

私たち保護司は、社会奉仕の精神をもって、

- 一、公平と誠実を旨とし、過ちに陥った人たちの更生に尽くします
- 一、明るい社会を築くため、すべての人々と手を携え、犯罪や非行の予防に努めます
- 一、常に研鑽に励み、人格識見の向上に努めます

各地区保護司 2025/10/1現在員数 計254名  
(青葉区72名 宮城野区49名 若林区37名 太白区56名 泉区40名)



クリスロード商店街桜井薬局前 昭和20年7月10日B-29爆撃機焼夷弾の爪痕を残すプレート



# 「昭和100年」 保護司制度・社明活動の基本理念

仙台市保護司会連絡協議会  
会長 小野 和 徳

今年度より2年間、若林地区保護司会が仙台市保護司会連絡協議会の担当地区になります。今まで積み重ねてきたことを大切にしつつ、時代の変革によって変わる保護司活動をしっかりと支援していくように皆様との関りを大切にしていきたいと思っています。

令和7年は昭和100年の節目の年になります。また昭和26年法務省の主旨により「犯罪や非行のない安全で安心な地域社会を築くこと」を目的に、社会を明るくする運動が始まってから75年目を迎えます。様々な節目の年を迎える今年度は今後の保護司制度の指針の年にもなります。

時代の変化を鑑み令和5年3月に閣議決定された第二次再犯防止

計画により、その年の5月から持続可能保護司制度の検討が令和6年10月3日の報告書提出まで14回検討されてきました。検討中の令和6年5月、大津において保護観察の面接中に保護司が殺害される事件が起きました。私自身はそのような危機感を感じたことはありませんでしたが、アンケートから不安を感じている保護司が数%いたようで検討中の保護司制度の議論の対象になりました。

今回は5つの課題について検討されていきました。「①推薦・委嘱の手順、年令条件」「②職務内容の在り方、保護観察官との共同体制の強化」「③待遇、活動環境」「④保護司の使命」また殺害事件から「⑤保護司の安全確保」が課題と

なりました。詳しい内容はホームページ、サポートセンターなどで確認できます。

このように時代と共に持続可能な保護司制度の見直しは、これだけよいというものではなく、今後も新たに出てくる課題への検討が必要で、今回の5つの中の「④保護司の使命」を改めて考えてみました。

保護司法第1条に「保護司は、社会奉仕の精神をもって、犯罪をした者及び非行のある少年の改善更生を助けるとともに、犯罪の予防のため世論の啓発に努め、もって地域社会の浄化をはかり、個人及び公共の福祉に寄与することを、その使命とする。」とあります。保護司の基本理念です。

昭和25年に制定された保護司法は75年以上に渡る間、人は変われるとの理念をもって、地域と共に支えあいながら生きていける社会をつくりたいという利他の精神のもと、社会を明るくする運動にも

取り組んできました。保護司は強固な使命感を持って地道な努力を積み重ねてきました。

しかし、時代の変化と共に利他のとらえ方が違ってきているように思います。その中であって対象者の処遇活動、犯罪者・非行少年の更生活動と、安全安心な地域社会の活動の大切な役割を担っている保護司であることに変わりはありません。

最近の保護司活動の変化の対応には、まだまだ課題もありますが、処遇活動において、希望により保護司の複数担当が増え、面接場所も更生保護サポートセンターなどで行われることが増えてきています。時代に応じた活動への変革期にあります。

今後も方法論は変わるかもしれませんが、変わることのない利他の精神を基本として、安心安全な地域社会の構築に貢献していきたいものです。



## 昭和・平成・令和の保護観察処遇を「ぶっくり」語る

仙台保護観察所

所長

田代 晶子

更生保護の源流は、明治時代の「免囚保護事業」にあると言われると思いますが、第二次世界大戦後の昭和24年、犯罪者予防更生法が施行され、現在の「更生保護制度」が成立しました。

この頃の保護観察はどのように行われていたのだろうと、「更生保護」誌の創刊号（昭和25年）をめくってみました。そこには「仮釈放と保護のための一犯罪心理」という論稿が掲載されており、犯罪者を「一時的犯罪者／持続的犯罪者」、「単一傾向犯罪者／多傾向犯罪者」、「早発犯罪者／遅発犯罪者」などに分類し、「これらの分類から改善の比較的困難であるか容易であるかの概略を掴むことができる」などの記述があり、現在の水準では必ずしも「科学的」とは言えませんが、今でいう「アセスメント」の視点があることが分

かります。

また、昭和26年新年号の齋藤三郎中央更生保護委員会事務局長（今でいう保護局長）の巻頭言は、「保護観察は深い人類同胞愛に基づくものであるが、その方法は科学的であるべき」とし、科学的な保護観察の具体的な展開方法として、「徹底したケース研究会」の必要性をあげています。

さらには、同じ号に、「保護司への助言」として「対象者に対して、徒に権威を振りかざすことのないようにしていただきたい。あくまでも、親しみをもって対象者の心置きない相談相手とならねえ」との記述があります。

このように、この頃から、私たち更生保護関係者の持つべき姿勢や目指すべき方向性は大きく変わっていないようです。しかし、もちろん、この80年間で、保護観察

処遇が何も変わっていない訳ではありません。

私が採用された平成7年頃は、カール・ロジャーズの「来談者中心療法」の全盛期で、これを活用した面接を極めることこそが保護観察官の専門性であるように感じていました。

一方、その前年には、ブリーフセラピーや行動療法を取り入れた「短期保護観察」が導入されており、「課題指導」などの新たなアプローチが始まった過渡期でもありました。

昭和・平成・令和の保護観察を語るに際し、平成16・17年頃、保護観察対象者等による再犯が相次ぎ、「保護観察は機能しているのか？」と世間から厳しい目にさらされた辛い時期について触れない訳にはいきません。

しかし、「ピンチはチャンス」。ここで一気に「更生保護改革」が進みました。認知行動療法を活用した処遇プログラム、簡易薬物検査、所在不明者を警察と連携して所在把握する仕組みなどが開始され、平成20年には、「更生保

護改革」の総仕上げとして、「更生保護法」が成立し、私たちは新しい基本法に基づいて保護観察を行っていくことになりました。

この頃のキーワードは「強靱な保護観察」であり、ハードな「指導監督」の側面が強調されがちでしたが、これが強調されればされるほど、対象者の改善更生には、彼らの生活を支える「補導援護」の側面もまた重要であることが、再認識されていきました。

平成28年には、「再犯防止推進法」が施行され、再犯防止が地方公共団体の責務とされたことから、就労、住居、医療、福祉等のいわば「補導援護」における地方公共団体等の関係機関との連携が進み、再犯防止のネットワークが拡大していきました。

このように、昭和・平成・令和と、保護観察処遇は進化を遂げていますが、ずっと変わらない「更生保護のこころ」を大切にしつつ、「令和の時代に即した保護観察」を充実させていきたいと考えます。



## 古い常識から新しい常識へ

東北会病院  
理事長

石川 達

精神科医になりたての頃から  
依存症の臨床に携わるようにな  
り、年数が経ちました。この  
間、依存症の概念が、アルコー  
ルや薬物といった物質から、ギ  
ャンブルやゲームなどの行動に  
まで拡がり、より身近な問題に  
なっています。しかし依然とし  
て、わが国では、依存症は「意  
志が弱いからやめられない」「怠  
けているだけ」「本人の責任」  
といった古い常識が、世間一般  
のみならず、医療関係者や保健  
行政関係者の中にも未だ根強く  
あります。それが、本人や依存  
症家族の回復を妨げる大きな障

壁となっています。依存症はれ  
つきとした脳の病であり、医学  
的・心理的支援が必要な疾患で  
す。

依存症になると、快楽や報酬  
を司る脳の回路に変化が生じ、  
理性では止めたくても欲求や行  
動が制御できなくなります。こ  
れは「自己責任」の範囲を超え  
ており、本人の努力だけで克服  
するのは困難です。しかし社会  
は依然として「やめられないの  
は甘えだ」と判断し、罰や排除  
によって対応しがちです。本  
人も責任を取れない自分を責め、  
罪悪感を募らせ、それらを飲酒

や薬物摂取などの依存行動で一  
時的に解決を図る、という悪循  
環に陥ることになります。その  
結果、当事者は孤立し、一層恥  
感覚や罪悪感を深め、支援に繋  
がることを恐れるようになりま  
す。「だめ！絶対！」という標  
語は、「悪いと分かっているでも  
繰り返してしまう」依存症者の  
罪悪感を更に強化してしまい、  
逆効果です。新しい標語が必要  
です。

古い常識を乗り越えるには、  
まず「依存症は病であり、適切  
な支援で回復する」という新し  
い常識で上書きし、広く社会に  
共有することが重要です。教  
育・啓発活動を通じて、依存症  
の科学的理解や回復可能性を伝  
える必要があります。また、回  
復者自身が体験を語るピア活

動や、支援者が非審判的な態度  
で関わることによって、古い常  
識を解きほぐす実践も有効です。  
宮城県は多様な依存症に対応す  
る自助グループが活動していま  
す。しかし、近年低迷する傾向  
にあることは残念です。様々な  
依存症に対応するには自助グル  
ープが不可欠であり、支援する  
ことも大切であると考えます。

依存症からの回復とは、単な  
る断酒・断薬にとどまらず、「つ  
ながりの再構築」「自己理解の  
深化」「新しい生き方の模索」  
を含む長期的なプロセスです。  
社会がその回復過程を支え、当  
事者が再び尊厳をもって生きら  
れる場を提供することが、古い  
常識を根本から変え、新しい常  
識が広まる力となるものと考え  
ます。



## 待つ力

仙台市青葉区長 谷田 至 史

30年を超える市役所勤務のうち、最も長く籍を置いたのが教育委員会。30代半ばから40代にかけての6年間は、学校給食を、その後、市立病院勤務を挟んで、40代後半からの5年間は、教職員の人事を担当した。トータル11年。この間、学校現場も含め多くの先生方と話をする機会を得た。行政事務職員である私は、学校教育とはどうあるべきか、子どもに寄り添うとはどういうことか、といった言わば教育観ともいえるべきものを持っておらず、折々の話は、自分の仕事を進める上でも、また子育て期にある親としても、とても貴重なものだった。年を経て役職

が上がると、学校では校長を務めるような先生方が、教育委員会では、自分の同僚や部下になるといったことがある。事務課題の検討にも行政職員と教育職員とのペースの違いが出て、侃侃諤諤の様相を呈することもあるのだが、そんなタイミングで、ある年長の職員が発言した。「教育の要諦は信じて待つことです」議論が止まったわずかの間に、言わずもがなを口にしたと思ったのか、「私も先輩から教わったのですよ」と続け、笑みが浮かぶ。この時の言葉、声と光景は、しばらく私の中に残った。去る6月26日、青葉区役所では「第75回社会を明るくする

運動」内閣総理大臣メッセージの伝達式が行われた。澤口会長をはじめとする青葉区保護司会の皆様が、メッセージを届けてくださり、併せて、日頃の活動の状況やその時々への思い、保護司になったきっかけ、続ける理由などを話してくださった。過ちに陥った人と縁を得て向き合い、少しずつ距離を縮め、言葉を交わし、心を通わせる、まるで糸を縫うかのように繋がりを深めていくことに腐心するエピソード、懸命に仕事に取り組んでいる姿を見たときの喜び、結婚し家族を持ったと聞いたときの感動など、経験に基づいた話には、それぞれに厚みと深さを感じられた。保護司の役割や責任、気構えややりがい、同時に抱える苦労や不安などに、あらためて心向け直す本心に良い時間となった。総理大臣メッセ

ージには、「過去の過ちから立ち直ろうとする人々には、十分な時間と地域の中での居場所が必要だ」とあり、また、「人は変われると信じ、それを待つことの大切さについても、御理解をいただければ幸いです」と記されている。更生の道を歩む者を支えるとき、そこには、根気強さと寛容さと覚悟を伴った「待つ力」が必要なのだ。伝達式では、こんな話も伺った。「約束して待ち合わせても来ないことがあるんですよ。でも、また連絡して待ち合わせをして…会ったときに、成長したなって思うときがあるのよ」向き合う実践者を前に、私は、「果たして自分は信じて待つことができるようになったのだろうか」と、繰り返し考えていた。



## 「母」

元仙台市立原町小学校

校長

遠藤 和彦

板の間の台所。箱のような流し台の隅に渡しかけられた俵板。流し台の脇には大きな水瓶。板の間の脇には竈が設えられた土間。昭和30年代半ば頃の実家（旧矢本町）の一角である。早朝、16間離れた井戸から水を汲み水瓶を満たし、桶で米をとぎ、竈に薪をくべ火をおこす母。母には小学校教員という仕事もあり、出勤時刻を気にしながら家事を行っていた。帰宅後も、持ち帰ってきた学校の仕事を夜遅くまで行っていた。どんな仕事をしていたのかを知ったのは、50年以上経ってからのことである。昭和40年代中頃、台所の様子は一変し、母の家事労働は軽減された。それでも、母

が学校の仕事を家に持ち帰らない日はなかった。それは、自分の子供だけではなく、教え子たちのためにできるだけのことをしようという母の強い信念（利他の心）の表れだったように思う。そんな母の姿を見て育った私が小学校教員になったのは、昭和52年のこと。楽しさとともに教師としての仕事の際限のなさ（教材研究や授業計画、週案等々）を感じていた。昭和50年代後半、母は早期退職をした。退職後、社会教育指導員や婦人会等を通して地域社会へ貢献し続け、宮城県地域婦人団体連絡協議会長も務めた。会長職を通して全国の方々と親交の輪を広げていった。この間、東日本大

震災が発生し、各地の婦人会から多大なる支援を受けた。その物資等を被害の大きかった地域へ届け、全国の婦人会への礼状の作成等に追われる日々が続いたと話す母。平成から令和に変わる頃、会長職を退いた母から、教員時代から保管してきた書類や資料の処分を頼まれた。一つ一つ読みながら裁断作業を行った。この作業を通して、家族の反対を押し切って宮城師範学校予科に入学したこと、まだ15歳であった。教員時代の学習指導案や授業記録、道徳全国大会での研究発表、特別支援学級児童への指導研究で教育長表彰を受けたことなど、学校教育にどれほど真摯に向き合ってきたか、また、婦人会会長職にどのように向き合い活動してきたか、母の信念が一貫していたことを知った。令和7年6月、95歳になった母の元へ、古希を過ぎた、石巻小学校時代の教え子四

人がやってきた。当時の遠足の写真を見ながら、思い出話に花が咲いたと、とても嬉しそうに、幸せに満ちた声で話してくれた。母の信念が、教育愛が「恩」として教え子たちの心の石に刻まれていたこと、「受恩刻石」を感じ取ったのであろう。その「恩」は「恩送り」として、多くの人々に広げられているに違いない。よかったね、かあちゃん。

## 「昭和100年」の風景



仙台つみの杜水族館

## 自然体験活動の有益性

オーエンス泉岳自然ふれあい館

館長 熊谷 祐彦  
まさひろ

泉ヶ岳は奥羽山脈の船形山系の一つで、豊富な湧き水が豊かな森をつくり、大都市仙台の近くにあつて、心癒される自然に触れられることから、四季を



通して多くの方々を訪れる景勝地となっております。2023年には「NHKにっぽん百低山・吉田類の愛する低山30」で紹介されました。

その泉ヶ岳の麓に、オーエンス泉岳自然ふれあい館は2014年7月に開館し、2025年3月末で約84万人の来館者がありました。当館の前身は、青少年を対象とした泉岳少年自然の家（昭和48年から平成27年）と成人を対象とした野外活動センター（昭和55年から平成20年）であり、自然環境の中における集団宿泊活動、自然体験活動等を通じ、心身ともに健全な青少年の育成及び市民の

生涯学習の振興を図る運営方針を継承しております。

自然体験活動につきましては、予てより文部科学省の研究等で有益性が認められております。

例えば、研究調査の結果（※1）によれば、自然体験活動を沢山した青少年は、「分からないことは、そのままにしないで調べることが多い」「誰とでも協力してグループ活動ができる」「相手の立場になって考えることができる」などを「当てはまる」と回答する者が多かつたそうです。また、「体力に自信がある」と答えた者が多く、逆に自然体験活動を行わなかった青少年ほど「体力に自信がない」と答えたそうです。加えて、「環境問題に関心がある」「得意な教科数が多い」という良好な結果でした。

自然の中で、他者とともに行

う体験活動によって、「自然環境」や「仲間」や「活動」から、刻々と変化する多様な刺激が青少年に降り注いできます。それを自分で受け止め、苦しみ、悩み、時には喜び、考えて、失敗や成功しながら、主体的な行動を起こしていきます。この繰り返し体験から、いずれ「生きている」「ことの喜びや楽しさや実感が生まれ、そして「たくましく生きる力」の源になるのだと信じております。

今後も当館は、青少年のみならず、成人の方々の自然体験活動の拠点地としての役割を自覚し、努めて参りたいと考えております。

（※1）引用参考文献…平野吉直教授（信州大学）中央教育審議会ヒヤリング資料

## 不登校支援の今とこれから ―地域とともに歩むフリースクール―

フリースクールだといと  
あすと長町高等学院 代表 石川 昌<sup>まさ</sup> 征<sup>ゆき</sup>



「民間で多様な学び場を作りたい」という強い思いから、私たちの学校づくりは始まりました。フリースクールだといとは、仙台市太白区にある不登校の小・中学生、高校生を受け入れる民間教育機関です。高等部は、宮城県教育委員会指定の技能連携校「あすと長町高等学院」と

して認められ、現在は60名の高校生が在籍しています。中学生や児童クラブの小学生を含めると、およそ100名が在籍しており、活気あふれる民間教育機関へと成長してきたと感じています。

令和5年度の文科省の児童生徒の不登校等に関する調査結果

によると、仙台市内の不登校児童生徒数は3,128人にのぼり、前年度の2,567人を大きく上回っています。行政や学校現場では「未然防止」や「初期待応」に真摯に取り組んでいます。また、在籍学級外教室「ステーション」を設置する小・中学校も増えており、不登校への初期待応が充実してきています。さらに、教育機会確保法の施行により、学校外の学び場も認められ、不登校支援においても多様な選択肢が求められています。

しかし一方で、ステーションや教育支援センターにも通うことができない児童生徒が存在するという現実も、私たちはしっかりと認識しておく必要があります。このような子どもたちにとっては、自宅待機が必要な時期もありますが、自宅外での学びの機会や、家族以外の人と関わる体験もまた、非常に重要であると考えています。自宅に待機する子どもたちに対して、行政や学校現場が具体的な手立て

を講じることには、多くの困難が伴っているのが実情です。

私たちは、教科書を使った学習を大切にしつつも、児童生徒一人ひとりの特性を理解し、将来設計につながるような多様なプログラムを提供しています。高校生の多くが、簿記・パソコン・介護などの資格を取得しています。さらに、近隣の保育園や小学校での環境整備、学校行事のボランティア補助などにも参加し、「自分は社会から必要とされている」という自己有用感を育むことができています。また、先生からの温かな声かけによって、「自分ではできない」という自己効力感も、大きく育っています。

このように、多様な学びの場は、学校や民間教育施設の中だけでなく、地域社会の中にも広がっていくことが重要です。学校・民間・地域が連携しながら、誰ひとり取り残されることのない社会を、皆さんとともに築いていきたいと思っています。

# 変わらないものゝ可能性は無限大

六郷児童館

館長

佐々木 康 之

私は、昭和39年、宮城野区榴岡（旧東十番丁）で生まれ、「駅裏」と呼ばれた街で「昭和」の時代を謳歌しながら育ちました。そして、「昭和」の最後の年に

た。教室には床より一段高い「教壇」がまだ残っていて、私はまさにその「教壇に立って」教員としての第一歩を踏み出したのです。

教員となり、「平成」の時代を子供たちとともに駆け抜け、「令和」となった昨年度末、南材木町小学校を最後に、教員生活を終えました。どの学校でも、かけがえのない、ありがたい縁に恵まれた37年間でした。

あれから37年……。昭和・平成・令和と、学校の姿は大きく変化しました。今、授業には一人一台の情報端末が使われ、運動会は午前中に終える形式が主流となり、教員の指導スタイルは「叱る」ことよりも「褒める」ことをより重視する方向へと移ってきました。これらはいずれも社会からの要請や、時代の課題にに応じて進化してきたものであり、「昔はよかった」などと言うつもりはありません。

初任校は、古川市立古川第一小学校（現大崎市立古川第一小学校）。当時、校地には昭和初期に建てられた築60年になろうかという木造校舎が南北に残っており、私が担任した5年生の教室もその木造校舎の一室でし

た。教室には床より一段高い「教壇」がまだ残っていて、私はまさにその「教壇に立って」教員としての第一歩を踏み出したのです。

歩んできた中で、「変わらなかったもの」もあります。それは、子供たち一人ひとりが持つ「無限の可能性」です。昭和の頃―初任で担任したY子は、友達からのいじめに悩んだこともありましたが、今では市議会議員として市民のために活躍しています。同じくK男は物静かな子でしたが、現在はNHK交響楽団で首席クラリネット奏者です。平成の頃―1年生で受け持ったH子は算数が苦手な子でしたが、得意だった書道の腕を活かし、高校教師を経て、現在は書道教室を開き、子供たちに指導しています。そして、自身の感情のコントロールに苦労していたA男は、大好きだった情報工学系の大学に進み、在学中からIT関連の起業をしているそうです。いずれも小学校時代には想像もできなかった姿であり、それぞれがたくましく成長した「令和」の姿です。

生まれて10年前後の子供たちは、まだまだ成長の途上にいます。大人の目から見れば、足りないことも失敗することも当然あるでしょう。しかし、それはかつての「私たち自身」の姿。「未完成」であるからこそ持っている輝きであり、「未来への可能性」を示すものです。私たち大人は、その可能性を信じ、温かく見守り、励ましの声を掛け続けていきたい。―学校という場を離れた今も、私はそう強く思うのです。



# 「昭和100年」昭和・平成・令和の変化

仙台市南材木町児童館

館長

小池 正弘

高度経済成長期（昭和30年～48年）は、私の小学生時代と重なる。家の周りに子どもが溢れかえっていた。いつもの駐輪場の空き地に行けばいつものメンバーが揃い、缶蹴りを夕方暗くなるまでした。駐輪場の屋根に上がり歩くことも、今となつては危険な遊びと言わざるを得ないが、当時は大らかというか大人は特に関心を持たなかった。夏になるとカナブンをビニール袋いっぱいに入れ、自慢しあった。パッタ（メンコ）やスナック菓子についていたカードに至るまで何でも集めることに夢中になった。兎に角、やること全てが子供に任され、自由の中で昭和の子供は育った。そ

して、遊びを通して善悪を知り、危険回避能力も同時に身に着けた。一方で、共働き家庭の増加に伴い子供の居場所づくりが急速に社会問題化してきたのも昭和である。そこで、子供の居場所づくりの取組の変遷をたどっていききたい。学童保育は戦後まもなく大阪や東京を中心に始まり全国に広がった。そして、1990年代、急速に進む少子化・高齢化、女性の就労支援が社会的な課題となる中で、学童保育の全国的な整備・拡充が政策課題となり、1997年（平成9年）児童福祉法が一部改正され学童保育は法制化された。そして、「こども・子育て支援法」により市町村が主体となつ

て実施する事業の一つとして位置づけられた。さらに1998年（平成10年）厚生労働省が定めた「放課後児童クラブ運営指針」を踏まえた実施が求められるようになった。仙台市では、旧泉市や旧宮城町が児童館の整備を先駆け、1989年（平成元年）仙台市が政令指令都市に移行すると共に児童館の整備が全市に広がった。現在、仙台市より委託された運営団体により113の児童館が運営されている。2023年（令和5年）（こども基本法）が施行されこども家

庭庁が発足した。子どもと若者の利益が大切にされる「こどもまんなか社会」をつくることが目標となった。2025年（令和7年）「放課後児童クラブ運営指針」等の改定を受け「こどもの権利」を理解し、子どもの意見を聴き、子どもの視点に立った居場所づくりを推進することが責務となった。今後、子どもを社会全体で見守る意識を持ち直し、子どもの成長を共に喜び合う寛容な社会の在り方・価値観の変容が今、令和の時代に必要なではないでしょうか。

## 「昭和100年」の風景



広瀬川の流れと  
蒲生干潟



# 令和のおやじの会は何をもたらすか

仙台市立富沢中学校父親の会

会長 後藤 篤志

太白区富沢・長町地域はおやじの会の活動が活発であると言われます。平成30年、仙台市内では約130の小中学校におやじの会があったと聞いております。これは市内小中学校の7割超にあたり、ほとんどの小中学校におやじの会が組織され

活発に活動していたことを示しています。おやじの会の活動目的は児童生徒の健全育成と会員間の親睦を深めることにあります。各校、子供の見守り活動や運動会等の学校行事の支援、サマーキャンプの開催等を保護者や地域住民の協力により行って

さる川フェスティバル  
(通称さるフェス)



夜間巡回



仙台リレーマラソン大会参加



参りました。しかし令和に入り新型コロナウイルスが蔓延すると活動が一変、一気に活動が停滞してしまいます。会員不足で活動再開が見通せず解散した等、残念な状況があちこちで発生し今日を迎えております。

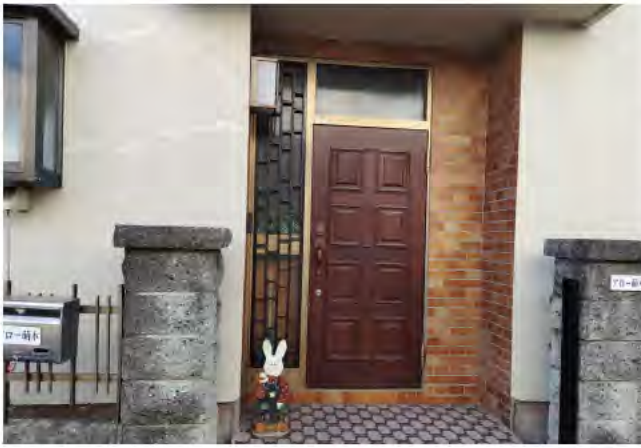
それではなぜこの地域のおやじの会は今尚元気で、周囲からも一目置かれるような活動が継続できているのでしょうか？その理由は近隣校同士の横のつながりがあると私は思います。おやじの会是我が子の通う学校に紐づいて結成され、その範囲で活動するのが通例です。よって子供が小学校を卒業するタイミングで退会するケースが多く活動期間が限定されがちです。ところが、富沢・長町地域では中学校二校、小学校六校各校区のおやじの会が一体となりお互いに連携しながら活動できているため、小学校の次は中学校のステージで、というように会員が長期にわたって活動することが可能となっております。また

不安の大きかったコロナ禍の時期、お互いに励まし合って乗り越えることができたことも横のつながりのおかげと感じています。小学校の活動期間中に既に顔なじみの関係性ができている仲間が多く、中学校に入りスムーズに活動開始できることも大きな強みです。子供の縁で仲良くなったおやじ同士が子供以上に仲良くなり、我が子の思春期という多感な時を（お互いに慰め傷を舐め合いつつ）乗り越えることができたと思います。

時代は令和へと変わり私のおやじの会の活動も10年目を迎えました。地域にも顔なじみが増え、家族皆が安心して暮らせていることにも繋がっています。このことからおやじの会の活動は、子供や学校地域の方々等がお互いに顔の見える関係をつくるためにも役立つと言えると思います。引き続きまして皆様の地域のおやじの会の活動にご理解ご協力を賜ります様、何卒宜しくお願い申し上げます。

## 使わない方が楽に生きられる、を目指して

アロー萌木  
施設長 小野 精華



アロー萌木



ミーティングルーム

アロー萌木は、依存症からの回復を目指す女性を対象にした支援施設です。利用者は自分のペースで通って来ます。ミーティングを目指して来る方、昼食を取りお昼寝をしていく方、定期的

に個別面接に来る方、困ったことがあったときに駆け込んで来る方など、使い方はさまざまです。話す内容も、依存症で困っているということからお金のやり繰りの仕方、栄養面

を考えた食事の摂り方、生活リズムの整え方、人間関係の悩み等、こちらもさまざまです。萌木では本人の選択を大切にしています。分がどうしたいか、どうしたくないかを感じるのが非常に大事なことで、と考えています。依存症を使って感情を麻痺させてきた人が再び感情を取り戻していくには、微かな自分の声を聴き逃さないよう、非常に穏やかで誰の顔色を窺うこともなくいられる、安心安全な場所が必要不可欠です。そのためスタッフは、評価や指示をすることなく寄り添い、微かな心の声を共に確認していきます。自分の中にあるものを本人が少しずつ感じ取り、言語化し、どうしても批判や否定をされない、という経験の積み重ねの先に本人自身の

選択があり、その選択の結果も自分で引き受ける。それを繰り返していくことが、依存症からの回復につながると考えています。

依存症は、好きで使うのだから自業自得と誤解されがちですが、萌木では素面<sup>しちふ</sup>で感じていたら生きていられないほどのネガティブな感情を麻痺させて、何とか生き延びるための手段だったとらえています。依存症からの回復とは、その感情に依存以外の方法で対処できるようになり、依存を使う必要がなくなるということかもしれません。依存を使わなくても、使わない方が楽に生きられるというところを目指して、今日も萌木は困っている依存症の女性の支援を続けています。

## ダルクを出てから

堀井 正 美

今回2度目となるダルクの入所をへて、ダルクプログラムやバイトプログラムを4年半やり自立をしました。

3年間バイトプログラムをやっている今までに自分の生き方の中に無いお弁当配達をし、今までと違う生き方をする事で、薬との距離を少しでも遠くなる様に努めて頑張っていました。最初の1年はなんとか頑張っていたいていましたが、もともと肌の持病や腰痛も重なり仕事を辞める事になりました。それ以外にも職場での人間関係等めんどうな事もあり自分のして来た過去の事等話せない事がストレスにもなり辞めてしまったので

す。ダルクの仲間との繋がりは有ったものの、一人でいる時間が多くなるにつれて仲間相談する事なく自分の考えで動く事が多くなり悩む日々がありました。自分の生活を少しでも良くするため就職活動を始めました。自分の年が55才と言う事もあり、中々自分に合った条件の仕事が見つかりにくく悩んだあげく年を取っても出来るタクシ1の仕事をするため2種の免許を取りに行きました。最初は頑張っているつもりですが、少しずつ時間が経つに連れやる気がうせ始め、それと同時に調子も悪くなり教習所に行かなくなり部屋にこもる事も多くなり、気

ばらしにパチンコに行くも、負けが込み借金が少しずつ増えていき、このままじゃ又同じ事をくり返すと思い、仕事の面接に行きました。人に褒められた仕事ではありませんが、自分の過去や色々な事も気にせずに雇ってくれる事になり、その日から日払いで働く事になり借金も少しずつ減り生活が安定してきました。人に褒められた仕事ではない為に少しでも昔の自分に戻

らない様にダルクに顔を出す頻度を増やし薬との距離を置けるよう過ごしています。  
まだまだ自分自身が安定していませんが、今後も仲間との関わりを持ちつつクリーンを保てる様に生きて行きたいと思っています。  
PS 今後自分自身が安定したら人に言える仕事につきたいと思っています。

### 「昭和100年」の風景



台湾(フンタン)祭 SENDA 2025  
(アクアイグニス仙台)  
復興への感謝込め



みどりの杜サマーイルミネーション 2025  
(農業園芸センター)  
光り輝くひまわりと七夕のイルミネーション



## ありのまま舎での経験を通して 思うこと

社会福祉法人ありのまま舎  
理事長 白江 浩

今回「しほれん第29号」への寄稿のお話を頂き、改めて当舎が社会復帰を目指す方々を職員として採用し始めた経緯について考えてみました。正確には思いつきませんでした。

最初は東日本大震災前のことで、15年以上は経過していると思います。最近是人材不足で協力雇用主の方でも人材確保を第一に考えておられる方が増えているように感じます。しかし、当時は今ほどではなく、全くの初めての方でも担当指導者をつけるぐらいの余力はあったと思います。

しかしながら、これまで7人ぐらいの方を受入れながら、現在は一ひとりも残っておられない

ことに、定着に向けた力量不足（指導力不足・育成力不足）を痛感しています。

社会福祉法人ありのまま舎は、最重度の方（人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアを必要とする方、重症心身障害の方など）が暮らす入所型の施設とグループホームや相談支援事業所等を運営しています。受入れは入所型施設が主でした。

介護の仕事は、言うまでもなく精神的にも肉体的にも、そして技術的にも楽な仕事とは言えません。特に重度になるほどに、支援（介護を含む）の幅や専門性は高まり、覚えることも多く、中途半端な気持ちでは継続できません。そういう意味で経験の

ない方だと、最初のハードルは高いと言えます。（以後、ハードルは下がっていくと思います）

しかし、きちんと指導や研修を受け、やる気（やりがい）がもてれば、自己実現できる可能性の高い仕事だと思います。その意味で、受入れる側の指導や研修体制を含む環境整備が整えられるかも、大きな要素だったと思います。通常の応募者（介護職を希望してくる）と同様の対応では、不十分（ていねいさや関わり）だと分かったのは受入れ始めてしばらく経った頃で、もっと早くに気づいていればと後悔することがあります。

1年以上働いた方もいましたが、残念ながら再び罪を犯して退職されました。人柄も良く、このまま定着してくれると期待していただけに、その時はショックでした。一方、数日（早い方は1日も業務に入らず）で姿が見えなくなった方もおられま

す。

ここ数年はお声がけがないので、受入れしていませんが、今後はそうした経験の下に対応できるのではないか、と思っています。





## 少年非行の現状

泉警察署

署長

西 條 博文

本年3月28日付けで、第28代宮城県泉警察署長に着任しました西條でございます。保護司会の皆様には、日頃から罪を犯してしまつた人や非行に走つた少年等の社会復帰の活動を献身的に取り組まれていることに対して、心から敬意を表します。今回は、最近の少年非行の現状について、泉警察署における推移を交えて述べたいと思います。昨今の県警察を取り巻く犯罪情勢については、令和6年の刑法犯認知件数が1万1,385件と、前年と比較して微減しておりますが、社会の変化は著しく、今後増加に転じることも懸念される状況にあります。また、大きな社会問題になっている特殊詐欺・SNS型投資・ロマンス詐欺の昨年1年間の被害合計額は約32億1千万円にのぼり、極めて憂

慮すべき状況にあります。令和6年中の県内における刑法犯少年の検挙、補導数は310人と前年より減少したものの、統計が残っている昭和26年以降最小であった令和4年より120人増加し、全国では、SNS上での犯罪実行者募集情報や地元の非行集団等を通じて匿名・流動型犯罪グループに加担して犯罪の実行役となる少年が見られ、県内でも少年が特殊詐欺の受け子などになる事件や大麻事件における検挙など、少年を取り巻く環境は依然として厳しい状況にあります。昨年の泉警察署管内における犯罪情勢は、刑法犯認知件数が887件と前年から約30件増加し、全刑法犯の検挙人数は、232人であり、このうち、検挙・補導した非行少年は16人で、全体の6・9%を占めております。泉

警察署発足当初から昨年までの刑法犯で検挙・補導した少年は、平成3年 県内3、481人 泉署340人(管内での全刑法犯に占める割合63・8%) 平成10年 県内4、061人 泉署438人(管内での全刑法犯に占める割合62・4%) 平成20年 県内1、543人 泉署150人(管内での全刑法犯に占める割合30・2%) 平成27年 県内495人 泉署37人(管内での全刑法犯に占める割合18・5%) 令和6年 県内310人 泉署16人(管内での全刑法犯に占める割合6・9%)であり、年々減少傾向にあります。各年代における少年非行の実態については、平成3年は、喫煙、不良交友等の不良行為少年が大幅に減少した一方、凶悪犯の増加、粗暴犯の低年齢化等の形態の多様化が全体の8割を占めている一方、非行集団による強盗等の重大非行事案が多発 平成20年は、これまで年々減少傾向であった「万引き」が増加に転じ、対教師暴力を

始めとする校内暴力事件が過去10年で最多の数値 平成27年は、いじめ事案や校内暴力事案が依然として発生し、インターネットの利用に起因したトラブルや犯罪被害が増加してまいりました。令和以降の少年非行は、検挙人員の増加や低年齢化、凶悪化、集団化に加え、少年を取り巻く環境の悪化や家庭環境、携帯電話の普及なども要因として指摘されています。少年非行の防止には、家庭、学校、地域など社会全体で取り組むことが重要です。未来を担う少年を犯罪の加害者にも被害者にもさせないため、各種関係機関・団体や個人の連携により、体験活動や有害環境対策などを推進し、自主性や社会性、正義感、倫理観を育むことが大切であると考えます。我々、警察も皆様と協力しながら少年の健全育成に取り組んで参りますので、今後とも、犯罪や非行に陥ってしまった人の立ち直り支援に御尽力を賜りますようお願い申し上げます。



## ともに歩む存在として

宮城県就労定着ネットワーク事業 リトライ！

認定NPO法人Switch

代表理事／保護司

今野 純太郎

「これまでは、どのような生活を送ってきましたか？」

刑務所や少年院を出た若者と向き合うとき、私たちはまず行動の「理由」ではなく、その人の「背景」に目を向けます。彼らのなかには、暴力やネグレクト、家庭の崩壊、経済的困窮など、小児期の逆境体験を抱え、安心して頼れる大人に出会えないまま、孤立と偏見の中で生きてきた人が少なくありません。

過去の履歴だけで判断されがちな彼らが再び社会とつながるには、「理解される体験」が必要だと考えるからです。

認定NPO法人Switch（宮城県仙台市）は、2011年から若年層の「生きづらさ」に寄

り添ってきました。2024年度からは「リ・トライ！宮城県刑務所出所者等就労・定着ネットワーク事業」に取り組み、出所者の再出発を支える支援を行っています。

出所後の生活には、制度や情報の壁、過去への偏見、社会的孤立など、さまざまな困難が伴います。そこで本事業では、誰にも知られずに相談できるWebサイトを開設。申し込みがあった方には、公認心理師やキャリアコンサルタントなどの専門職が個別面談を行い、否定せず耳を傾け、少しずつ信頼関係を築きながら「安心できる居場所」へとつなげています。

月1〜2回の居場所プログラ

ムでは、金銭管理、ストレス対処、職場体験、薬物依存や特殊詐欺に関する学びに加え、仲間との語り合いも重視。中心にはSST（ソーシャルスキルズトレーニング）を据え、実生活に即した対人関係の力を育んでいます。

参加者は当初の6名から31名に増加。延べ106名がプログラムに参加し、266回の個別相談を経て、24名が就職を実現しました。印象的なのは、居場所プログラムの場がいつも賑やかで笑いにあふれていることです。初めは不安そうだった人たちが、少しずつ笑顔を見せ、「ここならまた来たい」と語ってくれる姿に、私たちも学びと希望をもらっています。これは、参加者にとって、自分の過去を隠さずに過ごせる場所が、地域にいかに少ないかを物語っています。

本事業は、法務省保護局の協

力のもと、宮城県就労支援事業者機構、更生保護法人宮城東華会、職親プロジェクト宮城支部、ふうどばんく東北AGAINなど、県内の更生保護関係機関と連携して実施しています。私たちはこれからも、「教える」のではなく、「ともに考え、ともに歩む」存在として、一人ひとりの人生に寄り添い続けます。



「昭和100年」の風景

第43回泉区民ふるさとまつりにて

## 見守り、支え、繋がりが続けて

こども若者相談支援センター

所長 小池 健 治



「あ、この前も声掛けられた」  
繁華街でこどもたちに声を掛けるときがあります。『体調崩したりしてなかった？ 気をつけて帰るんだよ』何気ないやり取り

ができるのは、普段からの地道な声掛けの積み重ねがあり、こどもたちと専任指導員との信頼関係が構築されているからです。当センターで行っている業務の一つとして「街頭指導」があります。これは、冒頭の市内繁華街や各中学校区で行っている青少年への声掛け活動です。専任指導員にとって、街頭指導で接する対象は、小学生～20歳前後の若年層が大半です。会話を通して最新情報が得られたり、若者言葉を知ったりすることがあります。さらに、「また会えますか？」「次はいつ来ますか？」と再会を期待されることもあります。数年後、「就職が決まりました」と嬉しい報告を受けたこともあります。

時代の流れに対応して、当センターの役割も変遷してきました。

青少年の非行防止や健全育成を図るための「青少年指導センター」から、平成18年4月には、こどもと子育て家庭に関する様々な不安や悩み全般に対応する相談機関の役割を担い、「子供相談支援センター」となりました。

その後、令和5年4月の組織改正により、新たに困難を抱える若者（39歳まで）への支援業務を加え、こども・若者に関するワンストップ相談窓口機能を強化し、名称を「こども若者相談支援センター」に変更いたしました。

現在、当センターは0歳から39歳までの子育て家庭とこども・若者に寄り添い支援する相談機関となり、必要な支援をコーディネートする役割を担っています。制度の制約や年齢により支援が途切れないようフレキ

シブルに対応しています。

また、当センターは、「学校に行けない」「日中の安定した居場所が欲しい」という青少年のための居場所として、「ふれあい広場」を設置しています。

広場には、小学校高学年からおおむね20歳までの青少年が通所しており、毎月所内外での行事も楽しんでいます。スポーツ活動では、参加者が体を存分に動かし汗を流している一方、職員は、「若さには負けるね」と苦笑することもしばしば。今後通所者が一人一人のペースで成長していけるよう支援していきます。

保護司の皆様には日頃より、青少年の非行防止をはじめ、更生保護にご尽力いただいていることに心より感謝申し上げます。当センターは、これからも、保護司の皆様と手を携えながら、困難を抱えたこども・若者を見守り、支え、そして繋がりが続けていきます。

## 昭和100年を迎えて

シンガー・ソングライター／保護司 さとう 宗幸

最近昭和100年ということ  
で、歌番組で昭和の懐かしい歌  
を耳にする機会が増えた。「青  
葉城恋歌」からまもなく50年、  
「One of them」になったよ  
うで、若い歌手の方が歌ってい  
る姿を見ながら有難いと思いつ  
つ隔世を感じている。「歌は世  
につれ……」と言いますが、そ  
れぞれの時代の流行に包まれな  
がら、私にとっては常に音楽は  
身近にあった。小学生の低学年  
に大病を冒し2カ月に及ぶ入院  
生活、その病院の近くにあった  
パチンコ屋さんから1日中流れ  
ていたのが三橋美智也さん。小  
学2年生の少年が、なんと耳に  
馴染み過ぎた「おんな船頭歌」

を口ずさんでいるのです、毎日  
のように……。今の情報氾濫時  
代とは全く無縁で、ラジオのみ  
から流れる当時の人気歌手の歌  
にしっかりと耳を傾けていた時  
代である。まさに流行歌は時代  
の象徴。それ以降というものの、  
小学生の頃は三橋さんのファン  
で、今でもそのヒット曲は殆ど  
歌唱できるくらいである。懐か  
しいかな昭和の歌謡曲。中学に  
なりオールディーズや、カンツ  
オーネやらの洋楽を聴くように  
なり。高校生時分にはフォーク  
ソングに色染められ、自ら曲を  
作るようになる。とは言いつつ  
も、今の自分を夢見ることなど  
一度もなかった。歌手への憧れ

といったものは微塵もなかった。  
転機はカラオケといったものが  
無い時代に若者が集い、歌うと  
いった「うたごえ喫茶」の存在。  
そこでうたごえリーダーとして  
凡そ3年、歌うことを生業にし  
てから意識は大きく変わってい  
き、これまでの道筋はそこから  
始まったといえよう。全国的に  
存在していたその形態の店は今  
は皆無になってしまったが、今  
でもあの若者たちの顔や声が鮮  
烈に蘇る。まさに昭和の良き時

代に生きたものとの感慨である。  
かつて石ノ森章太郎さんがお元  
気な頃、ラジオ対談で一緒に  
機会があり、その最後に「また  
みんなで歌える歌を聴かせて下  
さい」とのコメントをいただく。  
もう半世紀近く前のこと、以来  
その言葉が心から失せることが  
ない。私にとってまさに「うた  
ごえ」で培われたとも言える創  
作姿勢は、流行に迎合すること  
なく昭和から今に至ってる。



# 今も生きるノムラの教え

tbc東北放送  
アナウンサー

守屋 周

2005年4月1日、東北楽天ゴールデンイーグルス創設年度のホーム開幕戦の日に東北放送に入社し、20年。初年度から取材し、2年目に実況デビューして数多くの試合をしゃべってきました。



その中でもとりわけ記憶に刻まれているのは、06年から09年、野村克也監督時代の出来事や「ノムさん語録」です。「マー君神の子、不思議な子」といったフレーズを覚えていた方も多いのではないのでしょうか？

野村監督は、毎試合前、2時間近くベンチに座り、練習を見ながらマスコミ陣と様々な話をしました。楽天の話、現役時代の話、世間話……とても公には言えないような話も（笑）。ここでの話が次の日のスポーツ紙の見出しを飾ることもしばしば。何が飛び出すか分かりませんし、とりあえず、毎回聞いていました、正直なところ、2時間聞いて

ているのがなかなか辛いこともありました。

その中で、今でも印象に残り、野球以外にも通じるものがあると感じる教えが「自分の特徴を生かせ」ということです。野村監督は常々「速い球を投げるのとホームランを打つ能力は天性のもの」と言い、努力で磨けるものではないので、その能力を持つて生まれた選手にはその力を伸ばすよう話しました。

一方で、足が速い、守備がうまい、フォームが変則的といった「一芸」に秀でた選手を好みました。短所には目をつぶり、長所を生かす。足が速い選手にはそれを生かすためにかくゴロを転がして出塁することをしつつこく説き、変則フォームの投手は必要な場面でピンポイントで起用するなど、選手の能力を最大限に生かし、適材適所の起用をしていたのです。

こうした考え、指導法は社会における野球以外の分野にも通ずるものがあると感じます。現代は「個性」を重視した教育の重要性が叫ばれますが、短所に目をつぶり、長所を最大限に生かそうとする野村監督のチーム作りはまさに選手それぞれの「個性」を生かしたものだのだと今になって改めて感じします。

ひるがえって私自身も、新人アナウンサーや後輩にアドバイスする機会がありますが、つい改善点を指摘してしまいがち。しかし、野村監督の考えを思い出すと、もっと「長所を伸ばす」よう促していくことが大事なのだ改めて痛感するので。人に教えることの難しさを感じ、自分自身は特徴を生かしているのかと自問自答しながら「人を遣すを上とする」という野村監督の信条が20年近くたった今、胸に響きます。

# 地区だより

—明るい社会を願って— 提言・随想・意見



## 青葉地区

一生学び、  
学べる今に感謝

保護司 石川 實 玄

保護司となり15年になるが、私は決して慣れたとは言えずさほど成長もしていないと思う。それは毎度受け持つ対象者が、年齢や性別、性格なども違うわけだから常に一から、という感じになるからだ。資料を読んである程度把握はしているものの、面接時はいつも真新しい気持ちで対象者と接している。観察の期間も様々でその間は考え悩むことの多い私だが学ぶことも多い。

こんな私でも「初心忘るべからず」が頭の片隅にあるのだろうか。仏教用語の『初発心』に由来しているといわれる『初心』は、人が初めて真理を探究しその道に進む

と決心した時の志である。それは誰しもが何歳であっても新しいことを始める時は初心者で、それはまたいくつになっても学ぶことがある、出来るということにもなるのだろう。つまり人は一生学び続けることが大切だということで、ただ今満65歳の私もシミとシワは増え、一昨年は病気で手術入院もして薬も増えたが、まだまだ学びは足りないと感じ、今後も保護司の活動も頑張りたいと思う。

三条支部「裁判所見学」



## しみじみ想うこと

保護司 渡辺 俊子

何もわからないまま二つ返事でお受けした保護司も20余年が経ちました。多くの方々との出会いを通して、本当にいろいろなことを学び、経験させて頂きました。

保護司となり初めて担当したTさん。緊張しながら少年院に面接で訪れたことを覚えています。担

少年の主張青葉区大会  
第一中学校開催



当保護司となり、あたたかかく見守り支援してくれた家族の協力もあり、しだいに心を開いてくれました。本人の自覚しだいでした。も軌道修正は可能なことを話し、少し背中を押しました。悩みながらもアルバイトを続け、精神的な成長も感じられ、今後は目標を持ち一歩一歩前進して行くことを伝え、保護観察を無事終了しました。

過日、結婚、出産を経て幸せな家庭を築いていると、ご家族から嬉しい報せを受け、感慨深い思いがしました。

絶望のとなりに  
だれかが  
そっと腰かけた  
絶望は  
となりの人に聞いた  
「あなたはいったい誰ですか」  
となりのひとはほえんだ  
「私の名前は  
希望です」

やなせたかし 詩

## 宮城野地区

### 病と登山と更生保護

保護司 相原 八重子

10年前から夫と二人で登山を始めた。岩手山や鳥海山等東北の名峰は全て踏破し、富士山・白馬岳・大雪山も登った。山により色々で、穏やかな稜線歩きもあるが、難所と言われる所もあり、それでも一歩一歩進む。そんなとき、可憐な花や絶景に出会うと疲れが半減する。山頂に立った時の達成感は感無量。下山すれば健康の尊さを再認識する。ところで何故登山を始めたか？ きっかけは自身の病。加齢による腰痛で、日常生活全てに支障を来したため、6時間に及ぶ手術をし、無事成功。せつかく助かった命、再発しないよう筋力をつけよう。そして山に

登ってみようと思った。その為にはトレーニングが必要。夕食後1時間の早歩きを日課にし、泉ヶ岳から始めて51座を登頂した。失いかけて初めて健康の有難さと維持する事の大切さに気付かされ、登山に繋がった。更生保護も病や登

山と似ている感じがする。対象者は事件を起こして初めて事の重大さ、普通の生活の有難さに気付く。時々事件をふり返り、深く反省し、再犯しないよう努める等……。どうか諦めずに前を向いて進んでほしい。道は続いているのだから。



社会を明るくする運動 広報活動  
楽天モバイルスタジアム



第2期定例委員会

## 昭和30年頃の農家の生活

保護司 色川 まさ子

今年は昭和100年、私はその中の3分の2を生きてきました。子供の頃の思い出は今でも強烈に思い出します。

茅葺屋根、天井のない部屋はよく百足が落ちてきました。ご飯は粃殻で炊く釜を使っていました。

お正月は旧暦でしたので煤払いが大変でした。昔は大変寒かったと記憶しております。障子洗い、煤のついた道具洗い、母親や祖母に言いつけられるまま一日中寒い外仕事で本当に体が冷え切りました。盆の迎え火は麦の茎を乾燥させたもので、暗くなり始めると一斉に門の前で焚き始めます。煌々とまたパチパチと音がして、どの家の前にも家人が話しながら火を見つめていました。賑やかで明るく心弾み近所の火を見て回りました。

まだまだ自然が残っていた頃で蜚を何匹か捕ってきて蚊帳に放し、朝、姿を探し周りましたが一度も

見つけることができませんでした。

まだ米が不足していた頃で毎年早期米を出すと奨励金が出たよう

です。夏休みの思い出は毎年、雀追

いで終わりました。一升瓶に水を入

れ、塩の効いた鮭と茄子漬けと

卵焼きと定番の梅干し弁当。おや

つはトウモロコシです。夏休み帳

を持って姉と毎日3キロほど離れ

た田んぼの中の小屋に通いました。

父が杭を組み立てて作ったもので

す。午後4時ころまで居ましたが

単調で大変眠かった思いがありま

す。又、色々なトンボがいて追い

かけて捕まえて遊びました。親の

思うほど仕事はしてなかったと思

います。七夕の時だけ早めに帰り

両親に市内見物に連れて行っても

らったのは覚えています。仙台駅

前、一番丁等、屋台で何か買って

貰い、疲れて父親に背負われて帰

りました。安堵感が安心感か、こ

の時とばかり妙に甘えた時間が愛

おしかったです。

## 若林地区

昭和100年と、

一羽の白鳥

保護司 小高 愛子

2年前に仙台へ移り住みました。

バードウォッチング好きな私たち

夫婦は、窓から広瀬川と白鳥の姿

が見えるこの場所を住まいとして

選びました。広瀬川には、羽を痛

めたのか、1年中そこに留まる一

羽の白鳥がいます。仲間と一緒に

北へ帰ることはできなくても、他

の鳥たちと共存し、夏には草陰に

身をひそめて暑さをしのぎながら、

四季の変化に順応して生き抜いて

います。その姿は、ただ健気とい

うだけでなく、したたかでたくま

しい。今いる場所で、背伸びをせ

ず、自分にできることに淡々と取

り組んでいく。そんな、飾らない

シンプルな生き方にも、魅力を感じ

じます。昭和、平成、令和と時代は大きく移り変わり、社会の価値観や生活のスタイルもめまぐるしく変化してきました。そんな時代の中で、私たち人間もまた、環境の変化を受け入れ、柔軟に、そして前向きに生きていく「したたかさ」が必要だと、その白鳥が静かに教えてくれているようです。

寄り添い、支え続ける

保護司として

保護司 三浦 奈名美

昭和から平成、そして令和へと時代は移り変わり、社会の姿もさまざまに変化してきた。戦後の混乱期には、貧困や家庭の崩壊が非行や犯罪と結びつくこともあったが、地域全体で支え合いながら立ち直りを支える力があったのではないかと思う。

平成に入ると経済は成熟していったが、人々のつながりは弱まり、地域の見守りも薄れ、孤立やSNSによる新たな問題行動が目立つようになった。そして令和の今、

貧困や虐待、ひきこもりなど複雑な課題は情報社会の中でより鮮明に表れ、大きな社会問題となっている。こうした状況に対応するため、再犯防止や社会復帰支援は地域・行政・民間が力を合わせる総合的な取り組みへと進んでいると感じる。

私が保護司としていつも心に留めているのは、「立ち直りを信じて支える」という使命である。自分にできることは何かを自問し、自己研鑽を重ね、一人ひとりに丁寧に関わり添う姿勢を大切に、これからも活動を続けていきたい。



若林区祝賀会



若林区理事会

## 太白地区

### オペラと日進月歩

保護司 佐藤 トヨ子

終戦後の日本の高度経済成長期、昭和の歌姫・美空ひばりなどの多くのスターらが、歌謡史を飾る様々なヒット曲を通して日本を元気づけた。私も当時の西城秀樹、山口百恵、ピンク・レディー等のアイドル歌手全盛期時代を過ごした。幼少時には、よく友達同士で、彼らの歌や踊りの真似をしては、公園でお披露目会などをして楽しんだ。

その後、音楽への興味から、学生時には吹奏楽部やジャズ研究会に在籍し、多くの仲間と過ごすことができた。

そして平成に入ると、阪神・淡路大震災、東日本大震災等の災害

が起こった。その中で、多くの歌手が被災地に出向き、被災者を励ます姿を見て、彼らから人としての生きざまを学んだ。

そして、令和。ひよんなことからオペラと出会った。今度は、私自身が少しでも聞いてくださる方の心を癒やせたらと願い、人前で歌っている。美空ひばりと比べたら月とスッポンなのだが、人の心に響くオペラが歌えるよう生涯努力していきたい。

### 趣味Ⅱ仕事

保護司 小金澤 綾子

私は6才から日本舞踊を習いはじめ今に至ります。昭和30年代頃は、裕福な家庭の習い事というイメージでしたが、私は決してそうではない。両親は仕事に行き一人で留守番、借家暮らし、友達が帰ってきたらその子から踊りを教えてもらおう、そんな姿を見て母が習わせてくれました。着物は着た切り雀、でも大好きになり27才で

資格を取り教えはじめ、切っても切れない存在になり一生の仕事となりました。それに加えて、組紐の資格も取り仕事に生かして

おります。世の中には生きるため好きでもない仕事をしている方もいる中で趣味が仕事になりとても幸せです。もちろん時間も掛けましたが協力してくれた両親に感謝します。お稽古に来てくれる方は、下は6才から上は90才近い方までおり、色々な話を聞くことができます。楽しい日々となっております。



太白地区研修

後も自分の体が動く限り今の環境に感謝しながら続けていくつもりです。幸いにも定年がないので……。



学校と保護司との地域連携推進強化事業  
聖和学園三神峯キャンパス



## 泉地区

### 「昭和100年」

### 昭和・平成・令和の変化

保護司 秋葉 賢也

昭和37年生まれのは、昭和100年の今年7月63歳になりました。平成元年は27歳でしたが、子供の頃はずっと昭和の時代が続くものと思っていました。祖母から「曾祖父母は、明治・大正・昭和の三代を生きて来たのよ」とよく聞かされたものです。この間の最大の変化は、世界に類を見ない「経済成長の実現」と「高齢化の進展」ではないでしょうか。敗戦の混乱の中から経済大国といわれるような飛躍を成し遂げました。昭和38年には100歳以上の高齢者は全国でたったの153人しかいませんでしたが、世界最速で平均寿命が延びた結果、昨年は

9万5千119人に達し、正に人生100年時代を迎えようとしています。一方で時代を経ても、一貫して変わらなかったものもあります。それは戦後復興の原動力ともなった日本人の持つ「勤勉さや真面目さ」だと確信しています。例えば昨年、全国の警察に届けられた「現金」の拾得物は、約228億4千万円で過去最高を記録しました。世界広しといえども現金の落し物が届く国は日本しかありません。いつの世であっても大切に継承していきたい精神ですね。

### 人との出会い

保護司 水野 修二

保護司に就任したのが9年前ですが、時の流れが本当に速く感じる今日この頃です。

今まで様々な対象者の方たちを担当させていただき、貴重な経験を積むことができましたが、今あらためて振り返ってみると、犯罪



加茂小学校にて出前授業

の直接的な原因は、家庭環境や人間関係による影響が大きいと感じます。一方、近年はインターネット社会の進展に伴い社会情勢も多様化し、「罪」の形も以前とは異なる様相を呈しており、孤立や経済的困窮等により、社会での生きづらさを抱えた人たちの課題が深刻化しています。

くまでも寄り添いながら励ますことが大事なことではないかと思えます。

新たな「人との出会い」によって新しい「縁」つながりが生まれます。また、「人は変わる」という更生保護の理念にかなうように、本人がその家族や職場そして友人、知人との関わり合いの中で、当たり前の日常生活を持てるよう、しっかり見守ることを心掛けてまいります。



社会を明るくする運動

## 「昭和100年」の心打たれる歌詞

### 上を向いて歩こう

作詞 永 六輔  
作曲 中村八大  
歌手 坂本 九

上を向いて 歩こう  
涙が こぼれないように  
思いだす 春の日  
一人ぼっちの夜

上を向いて 歩こう  
にじんだ 星をかぞえて  
思いだす 夏の日  
一人ぼっちの夜

幸せは 雲の上に  
幸せは 空の上に

上を向いて 歩こう  
涙が こぼれないように  
泣きながら 歩く  
一人ぼっちの夜

思い出す 秋の日  
一人ぼっちの夜

悲しみは 星のかげに  
悲しみは 月のかげに

上を向いて 歩こう  
涙が こぼれないように  
泣きながら 歩く  
一人ぼっちの夜  
一人ぼっちの夜

### 二度とない人生だから

作詞 坂村真民  
作曲・歌手 さとう宗幸

二度とない人生だから  
一輪の花にも  
無限の愛をそいでゆこう  
一羽の鳥の声にも  
無心の耳をかたむけてゆこう

二度とない人生だから  
一匹のおろぎでも  
ふみころさないよう  
ころしてゆこう  
どんなにかよろこぶことだろう

二度とない人生だから  
一ぺんでも多く便りをしよう  
返事は必ず書くことにしよう

二度とない人生だから  
まず一番身近な者たちに  
できるだけのことをしよう  
貧しいけれど  
こころ豊かに接してゆこう

二度とない人生だから  
つゆくさのつゆにも  
めぐりあいのふしぎを思い  
足をとどめてみつめてゆこう

二度とない人生だから  
のぼる日 しずむ日  
まるい月 かけてゆく月  
四季それぞれの星の光にふれて  
わがこころをあらいきよめてゆこう

二度とない人生だから  
戦争のない世の実現に努力し  
そういう詩を一篇でも多く作ってゆこう  
わたしが死んだら  
あとをついでくれる若い人たちのために  
この大願を書きつづけてゆこう

# 優秀作品紹介 ～優秀作品5編～

令和7年度「少年の主張」仙台市各区大会

## 私の主張

主催 仙台市青少年健全育成協議会

青葉区

### 私が歌う先にあるもの

宮城教育大学附属中学校 3年 菅原 琥<sup>こ</sup> 千<sup>せん</sup>

「将来は国連に入って、困っている人たちを助けたいんだよね。」

小学6年生の時ある日の帰り道、友人が私に話してくれた言葉です。調べてみると、「国連」というのは国際平和の維持や社会の発展のための組織で、難民支援や紛争地

域での平和維持活動など、世界を幅広く支える活動をしていることが分かりました。顔の知らない誰かのために自分の命をかけられるなんて、すごいと思いました。そしてそこで働きたいと思っている友人を心から尊敬しました。

私はというと、幼い頃から歌がとにかく大好きで、将来の夢は歌のおねえさんとミュージカル俳優。大勢の人の前で歌うことを夢見て研鑽を積み、東京でミュージカルに出演させてもらうなど、徐々に活動の幅を広げていた最中でした。ですが、自分の夢と友人の夢を比べたとき、なんだか自分の夢が独

りよがりで自己中心的なのではないかと感じてしまいました。友人は自分ではない誰かのために、私は私自身のためだけに、夢を追っているのではないかと。

それからの私は、「私の本当になりたいことってなんだろう」と考え続けました。歌のコンクールでは、思うような結果が残せず悔しい思いをすることもありました。決して順風満帆な日々ではなかったのですが、それでも私にできること、私のやりたいことを見つめるために、中学生になってからもひたすら努力し続けました。

そんな中、テレビのニュースで、私の好きなミュージシャンが音楽を通して、国内外で支援活動をしているということを知りました。このとき、誰かのために活動することにも、様々な形があると気付きました。私も自分のやり方で人を笑顔にできる活動をしてみたい。

そんな思いを抱き始めた中学2年生の冬、幼い頃に通っていた幼稚園で、歌のソロコンサートボランティアでさせていただけることになりました。相手は幼稚園児、場所は幼稚園のホールです。私は、もっと大きなステージや多くのお客さんの前で歌ってきた経験があります。だからこそ、しっかりと切り切る自信がありました。ですが、そこで改めて、「歌の力」に気付くことになるのです。「ああ、そらにえをかこう」私が歌い出すと、次第に子どもたちも手をたたき、口ずさみ、互いの緊張がほどけていきました。目の前に広がるのは満開のひまわりのような子どもたちの笑顔。私の歌に、笑顔で返してくれることが本当に嬉しく、心が震えるのを感じました。ああ、私の本当にやりたいことってこれだったのかもしれない。私の歌が、みんなの笑顔に繋がっている。舞台の大きさや、お客さんの数なんて関係ない。この笑顔のために、私は歌うんだ。「歌う意味」に気付けた瞬間でした。

皆さんには夢がありますか。その夢を追うことに対して、不安になったり、諦めたくなったりしたことありませんか。私はたくさん悩みました。友人の夢と私の夢を比べ、私の夢は誰のためにもならないのではないかと不安に思いました。ですが、夢と向き合い続けた結果、「歌う意味」を見つけれました。困っている人に直接手を差し伸べる友人の夢。誰かの気持ちに寄り添い、そっと背中を支える私の夢。夢の形は違えど、どちらも誰かの笑顔に繋がっていると感じました。私は、自分の歌が誰かを支えることに繋がるのなら、歌い続けたい。「この人の歌が安心できる居場所なんだ」と

宮城野区

## キャンサーギフトの母が教えてくれたこと

仙台市立鶴ヶ谷中学校 3年 佐藤 克樹<sup>かつき</sup>

「克樹のお母さん、かつらなの？」

そう聞かれて、私は言葉に詰まり、咄嗟に笑って誤魔化しました。

思ってもらえるように頑張りたい。いつか憧れのミュージシャンのように、歌で社会貢献ができるような人になりたい。私が歌う先にあるものを求めて、これからも歩み続けていきたいと思っています。

私に多くのことを考えるきっかけをくれた友人は、今どんなことを考えているのでしょうか。次に会うときには、自分の夢を胸を張って伝えたいと思います。「私は多くのの人に歌で笑顔を届けたい」と。



い「現実」だったのです。

母が癌になったのは31歳のとき、母は妹を妊娠していました。私も、すぐには信じられず、「癌妊娠中」「癌 30代」と検索しては、ただ漠然とした恐怖を感じていました。治療が始まり、髪が抜け、日に日にやつれて行く母の姿を目の当たりにして、ようやく私も「母は本当に病気なのだ」と正面から向き合うようになっていきました。いつも元気で、豪快に笑っていた母の弱々しい笑顔を見るたびに胸が締めつけられました。

その夜、私は母に、友達にかつらについて聞かれたことを伝えました。母は少し黙った後、「そんなに悪そうに思わないで。無理に言うことも、変に隠す必要もないんだよ。でも、もう無くてもいいかもね。」と静かに言いました。

3日後、母は友人の美容師を自宅に招き、短く髪を整え、かつらを被らずに出かけていきました。私は驚いて、「本当に大丈夫なの。」と聞きましたが、「うん。これが今の私だから。無いものを

求めるより、今できることを最大限に楽しみたい。この短い髪も気に入ってるんだよ。」と豪快に笑いました。その姿は髪がなくても、以前のように堂々としていて心から母の強さを尊敬したのです。

「癌」は母から多くのものを奪いました。長い髪、体力、仕事、そして安心して過ごせる毎日。でも、同時に母は「受け入れる強さ」と「ありのままを生きる覚悟と勇氣」を手に入れたのだと思います。隠すではなく、さらけ出すこと、弱さを抱えながらも前に進むこと、それが人の心を動かす本当の強さなのだと母が教えてくれたのです。

皆さんは「キャンサーギフト」という言葉を知っていますか。癌を通して得られる気づき、出会い、価値観の変化など、苦しい経験の中にも「贈り物」があるという考え方です。母は「癌には癌の人たちの社会がある」というほど、たくさんの「贈り物」があったといえます。いま「AYA世代」(Adolescent and Young

Adult) と呼ばれる15歳から39歳の若者たちにもがんを経験する人が少なくないそうです。進学、就職、恋愛、結婚、出産といった人生の大きなイベントと重なる「AYA世代」の癌には、特有の悩みが生まれます。特に、「若いのに癌?」「若いから大丈夫」「病は気から、気持ちで負けなければ大丈夫」といった誤解や偏見が患者を孤独にしています。外見だけでは分からない不安や苦しみが「AYA世代」には一人一人あるのです。

そして、それは、癌ではない私たち「AYA世代」にも言えることです。「見えない痛み」や、口にしない「悩み」は誰でも持っています。そこに寄り添い、支えられるよう、私たちは正しい知識と想像力を持つ必要があるのではないのでしょうか。

母は現在、定期的に検査を受けないながらも元気に過ごしています。体は完全に元通りではないかもしれませんが。でも、心は以前よりずっと豊かで、豪快で、強く

なった気がします。母の病がくれた「ギフト」は私の行き方の軸となっています。母のように困難を受け入れて生きる人たちが安心して過ごせる社会、一人一人の「見えない痛み」に寄り添える人であること、そうした社会を作ることが、今の私たちに求められているのだと思います。

最後に、私は「見えない痛み」を持つ全ての「AYA世代」に

伝えたい。「痛み」を口に出していいのだと。そのさらけ出す勇氣が誰かの共感を呼び、理解となり、いつか誰かの「ギフト」へとつながるのだから。



若林区

## Until we are all equal

宮城県仙台二華中学校 3年 早坂

みどり  
翠

知らず知らず差別をしていた自分に気付く。皆さんは、そんな経験をしたことはありませんか。私は、自分の中に潜む差別意識に気づかされる経験をしたことがあります。

私は、宮城県仙台市の中心部から約20km北西にある色麻町という町に住んでいます。町の西側には奥羽山系の山並み、東には大崎平野が広がる、農業が盛んな、の

どかな町です。この町から、私は、毎日、90分かけて、仙台市内にある中学校にバス通学をしています。毎日同じバスに乗っていると、他の乗客とも顔なじみになります。ある日、帰りのバスを待つ私に、一人の女性が話しかけてきました。今まで、自分の得意なことや好きなことを仕事にしてきたこと、今は、バスで仙台の学校に通っていること、女性はいろいろ

な話をしてくれました。私は、大人なのに学校に通っていることを少し意外に感じました。聞くと、その女性は、高齢の父親の介護が必要になったときのために、福祉について勉強しているのだそうです。女性は「来年、還暦を迎える歳だけど、学校に通っているんです。」と朗らかな口調で語っていました。

帰宅し、翌日の学校の準備をしている時に、潑刺としたあの女性の姿が思い浮かびました。私は、好きなことを仕事にできることも、父親のために学校に入り、勉強し直すことができることも「ステキだな」と思いました。憧れに似た感情?しかし、何か腑に落ちない。もしかして年齢にたいする偏見? 大人が学校に通うことは珍しい、つまり、普通ではないという考えを、自分が持っていることに気付いたのです。もう一度、あの女性の顔が浮かび、「失礼なことを言うてしまったかもしれない」と不安になりました。それ以来、私は、「普通だったらこう」と自分に引

きつけるのではなく、「こういうのもあるんだな」と相手を受け入れるように努めています。

偏見や思い込みによる、無意識な差別的発言や否定的な言動を「マイクロアグレッション」と言うそうです。「マイクロアグレッション」は私たちの身近に溢れています。溢れているのに解決が難しいのは、その言動が無意識下に隠れているからです。隠れた攻撃性は知らず知らず相手の心を傷つけ、時に人権を侵害する、重大で深刻な差別に繋がります。

この隠れた攻撃性を可視化し、改善するためにはどうすれば良いのでしょうか。まずは、意識の俎上に乗せることが大切ではないでしょうか。そこで、私は、世界が直面している差別を調べてみることにしました。私の隠れた攻撃性はエイジズムでした。

エイジズムという語の発祥は1969年と言われています。こんなに古くから年齢差別が存在し続けていることに驚きました。現在、世界が直面している差別は、

エイジズムだけではありません。エイジズムと合わせて3大差別と言われるレイシズムやセクシズム、少数民族の権利、先住民民族、障害を持つ人々、移住労働者等、様々な差別があります。こうした差別を放置すること、こうした差別に無知であることによって、人々の無意識下に、隠れた攻撃性が自然と育まれるのだと思います。

差別を解消するために、実効ある具体の行動を起こすのは大切です。しかし、中学生である私達にとって、差別を知ることまた大切です。差別を差別として認識することは、差別のない未来、差別

## 太白区

### 見えないもの

仙台市立愛宕中学校 3年 岩 本 侑 奈

先日、中学生がいじめに苦しみ、自ら命を絶ったというニュースを目にしました。胸が痛みました。「いじめをなくそう」そんな言葉を、もう何度も聞いてきたのに、どうしてこのような悲しい出

のない世界の創造に繋がっていると思います。こう考えるきっかけを与えてくれたのは、同じバスに乗車する、あの女性でした。色々な人と関わることで、己を知り、多様な考え方ができるようになるのだと思います。

差別はなくなっていくべきです。偏見や思い込みをなくし、互いの違いを認め合うことは確かに簡単ではありません。しかし、「We are all equal 私は、これからも、人との触れ合いを大切にしたい。そうした関係性を結ぶことが、平和な世界、差別のない未来につながる」と信じます。

は見えません。だからこそ、気付くのはとても難しい。でも、「見えない」ということと「ない」ということはまったく違います。見えないからこそ、想像することが必要だと思うのです。

私にも心が沈んでいた時期がありました。友達がいらないわけではありませんでした。でもみんなと同じ場所にいるのになんとなく自分だけ輪の外にいるような気がしていました。話しかけようとしたけれど、うまく言葉が出てこない。笑い声が遠くに感じる。そんな日々が続いて自分の居場所がよくわからなくなっていました。そんなある日、私は部活動の大会で学校を1日休みました。その大会は私にとって最後の大会で、今までにないほど緊張して挑んだ試合でもありました。結果は、目標にしていたものには届きませんでした。私の中ではとても満足のいく試合でした。晴れ晴れとした気持ちでしたが、次の日からまた学校が始まると思うと、少し憂鬱でした。

重い足取りで階段を登り、教室のドアを開けました。いつもどおり、自分の席につき、荷物を整理していると、

「お疲れ様。」

と声が聞こえました。

私は最初、その声が自分に向けてられたものだと思いませんでした。でも、横を見ると、クラスメイトが明るく柔らかい表情で私に笑いかけていました。突然のことで、驚きました。驚いたけれど、その時、私の心の中に何だか温かいものが広がったことを今でもはっきり覚えています。休んでいた自分のことを気にかけてくれた人がいたことが、心底嬉しかったのだと思います。何気ない一言。でもその一言に私は救われたのです。

その子だけではありません。私の周りではすぐそばで見守ってくれた人たちがいました。いつも静かに私の話を聞いてくれた母、私の寂しさに気付いて話しかけてくれた先生、他愛もない話で笑わせてくれた後輩。そうしたたくさん

の人の優しさが、私を支えてくれたのです。

もし、あの中学生にも、痛みに気づいてくれる人がいれば、一度でも話しかけてくれる人がいれば、尊い命を救えたかもしれない。そう思うと、私たちの「見ようという態度」には、想像以上に重い意味があるのではないだろうか。では、どうすれば良かったのか。どうすれば私たちは、その見えない痛みに関心することができたのでしょうか。

答えは簡単ではありません。けれど、第一歩は気付こうとする気持ちを持つことです。いつも笑っているあの子の本当の気持ちに気付くこと。誰かの「大丈夫。」の裏に声にならない思いがあるかもしれないと想像すること。そして、その子に寄り添う行動をためらわないこと。たった一言で、ささいな行動一つで、人は救われることがあります。私はそれを自分の体験を通して知りました。

難しいことではないけれど、勇気のいることかもしれません。声をかけて、自分の勘違いだったら

どうしよう。なんて考えてしまうこともあります。でも、私は思います。声をかけて間違えることよりも、何もしないまま誰かの心が壊れていくことのほうがずっと悲しい。

私たち中学生は、まだ子どもだから力がないと思う人もいるかもしれませんが。けれど私達には、「相手を思う力」があります。「寄り添う力」があります。私達に必要なのは、知識でも権力でもありません。見えない痛みに関心こうとする力、そのために一歩近づく勇

泉区

## 夢を失っても

仙台市立寺岡中学校

3年

フエイガン

瑠輝奈るきな

みなさんは、夢を失ったことがありますか。わたしは、自分のすべてであった大きな夢をたった一度の怪我で失いました。

私の夢はフィギュアスケート選手になることでした。いつかオリンピックに出て、金メダルをもらうことを夢見ていました。この夢

気、それは誰かの命を救う力になるはずです。

あの時私の痛みに関心してくれた人達のように、誰かの痛みに関心する人でありたい。あの時貰った優しさを今度は私が誰かの心に届けたい。その行動が、見えない痛みの中で希望の光になると私は信じています。



んいただきました。

ある日、私はいつものようにジャンプの練習をしていました。その日はいつもよりやる気に満ち溢れていて「絶対に跳べる。」そんな気がしていました。「先生が教えてくれた通り、いつも通りにやろう。」そう思いながら、次々にジャンプを成功させていきました。自信がついてきた私は徐々にスピードをあげ、ジャンプを飛ばうとした、その時です。私は転び、背中からリンクに叩きつけられました。理解がまったく追いつかず、立ち上がることもできません。私は尾てい骨を強打し、スケート選手になるという大きな夢の幕を閉じました。

スケート以外何もしてこなかった私は、夢も希望もこれまでの努力も、何もかも失った絶望でいっぱいでした。

しかし、私を優しく支えてくれる家族や仲間がいました。ダウン症であり福祉施設で働いているおじは、暗くなっている私を元気づけるために施設のお祭りに連れて

行ってくれました。そのお祭りは、運営もすべて障がいのある方が行っていました。自分にできることをみつけ、たくさんの人を楽しませようとしている姿を見て、わたしも頑張ろうと立ち上がる勇気をもらいました。

母は「新しい何かを見つけるために」と、習字や絵画に挑戦させてくれました。何度も何度も挑戦するうちに、「自分の想いをそのまま形にできる。」ということに感心し、芸術の素晴らしさを知りました。絵画では、ネガティブなことばかりを考えてしまうとどんなパレットが汚れていき、作品全体がにごってしまいます。習字も同じで、自分の感情がそのまま作品に表れます。今では、墨の香りに浸り集中力を高め、一発勝負で書くことが大好きです。絵画と習字の先生はよくこう言います。「なにかを成し遂げたいことがあるなら、まずは気持ちから。」前向きに挑戦し続ける気持ちをもち、ことがどれだけ大切か。絵画や習字に出会わなければ、私はこのこ

とに気が付かなかったかもしれない。

そんなある日、人数不足で大会に参加できない妹が「一緒にバレーボールをしよう」と何度も誘ってきました。私は球技が大の苦手でしたが、挑戦してみることになりました。当時小学6年生だった私は、チームで唯一の最高学年。みんなより経験も少ない中、必死に練習に励みました。私にもできることはないか。そうだ、笑顔で声を出して、チームを盛り上げればいい。（今までは自分との戦いだったけれど、バレーはチームプレー、仲間を頼っていいんだ。自分ができることを精一杯やればいい。そう思えるようになりました。卒業大会ではキャプテンを務め、チーム全体で一生懸命戦いました。結果は負けてしまいましたが、みんなが私の卒団を惜しみ、泣いてくれました。私も優秀選手賞をいただきました。最高の思い出ができました。どんなに忙しくても、私のためにすべての習い事の送迎をしてくれた祖母にも感謝の気持ちで

いっぱいです。

私は、自分のすべてを失った絶望でいっぱいでした。しかし、支えてくれた家族や仲間のおかげで、興味がなかったことや苦手だったことから学び、今まで知ることのなかった新しい自分に出会い、幸せを実感できました。失った夢が大きければ大きいほど、悲しみも大きい。しかし、今まで見ようとしてこなかったものにも目を向けられるのです。夢を失ったとしても、きっとそれはいい経験です。私はこれからも、壮大な夢を見つけて、それを叶えるために、もっと色々なことに挑戦します。「なにかを成し遂げたいことがあるなら、まずは気持ちから。」今までとはちがう自分に出会うことを目指して。



ある保護司からのメッセージ

## 「死を見つめるきみに」

人間って不思議ですね。楽しい時は生きている実感が無いけれど、苦しい時は生きている実感がすごくある。

人間って不思議なもので、浮浪者・暴力団・風俗政治家・公務員・サラリーマン・自営業、どんな職種の方でも共通点が一つある。何でしょうかね？

生きている？ 一生懸命？ 動いている？ 色々あるとは思いますが。

思うに、自分の生きている時間を費やして動いているんだよ！

浮浪者——生きる為にゴミをあさったり、ビン・缶などを集めて生きる為に自分の時間を使っている。

暴力団——賭博・ノミ行為・詐欺・脅しなど悪さばかり。それでも生きる為に自分の時間を使っている。

風俗——客の接待をして、世間からダメだと思われながらも、他人の為に一生懸命自分の時間を使っている。

政治家——政策を進め国の為に動くけど、給料もらい生きる為に自分の時間を使っている。

サラリーマンも同じ。自営業も同じ。どんな職業でも同じなんだ。

学生だって将来の為に今勉強し、生きる為の準備として自分の時間を使っている。

どこか違いますか？ 皆同じでしょ！

自信を持つようよ！ 一生懸命自分の生きている時間を費やしているのだから。どんな仕事でも、恥ずかしい事は無いよ。

でもね、その中で悪さだけは止めようよ。人に迷惑かけちゃ罰が当たる。人の嫌がる事をして楽しいかな？ 悲しい事でしょう！

自分の為に、他人の為に、自分の生きている時間を使おうよ！

時には苦しいかもしれない。でも時には楽しい事もある。

生きていれば色々な事に会って、思い出がたくさん出来る。

リストカットする方がいるよね。生きる為にしているんだよね！

死にたいから体を切っている訳ではないよね。生きている証が欲しいんだよね！

最近、自ら死を望む方が多くなってきた。心が悩んでどうしようもないんだよね。

でも、心の悩みも病気なんだよ。

心の病は薬では治らないよ！

心と心でしか治せないんだよ！

だから、考えようよ。誰かに相談しようよ！

1人に相談してダメならば、3人探して相談しよう。

3人がダメなら、5人に相談しよう。5人がダメなら10人に相談しよう。

どんどん相談しようよ！

出来るだけ早い内から相談しよう。自分の中に自分の心が隠れる前に。必ず自分の事を分かってくれる方が出て来るからね！

自分の中に閉じこもってはダメだよ。不安かもしれないが、話そうよ！

そして、頑張らなくていい。一生懸命にならなくていい。自分なりに一歩前進してみよう！

もしダメだったら一歩さがればいい。

二歩前進してみよう！

もしダメだったら一歩さがればいい。自分で無理せず歩んでみよう！

少しだけ勇気を出して！

お話ししよう！

「皆と自分は違うんだ！」そうじゃないよ。

「何を話しても分かってくれない！」そうじゃないよ。

「どうせ自分は嫌われている！」そうじゃないよ。

自分からチョットだけ心開いてみよう。

何かが変わるはず！

自分からチョットだけ話をしてみよう。

何かが変わるはず！

自分からチョットだけ動いてみよう。

何かが変わるはず！

話上手は、とても話がうまいけれど、聞き上手にはなれないよ。でも！ 聞き上手な方は、話上手にもなるんだよ！

チョットだけ勇気を出そう！

頑張らなくていいから、無理しないでいいから、一歩前に出てみよう！

本当は話したいんだよね。本当は話してもいいんだよね。本当は一緒に側に居てほしいんだよね。

怖くないから、自信がなくても自分の中から出てみよう！

少しでいいから！ 無理せずに！

死というのは、自分の生きた証の集大成だ。

自分が生きてきた評価がされる時なんだ。

だから最後まで、自分の寿命が来るまで、自分の生きている時間を使い、沢山の思い出を作って行こう。

楽しい事も・苦しい事も・嬉しい事も・悔しい事も、

楽な時も・つらい時も・笑顔の時も・泣きたい時も、

生きているからできるんだ。

全て自分の生きた証なんだ。

一歩前に足を出してみようよ！

不安かもしれないけど、必ず、何か変わるよ！

絶対に！

## 編集後記

りまく生活環境も大きく変化しました。言葉や価値観や常識も驚くほど変わりました。

今年2025年は、昭和元年から数えると百年目にあたります。そこで、しほれん29号は「昭和百年」昭和・平成・令和の変化というテーマを掲げて編集に取りかかりました。ちょうど、社会を明るくする運動も75回目にあたります。約百年前の仙台市の出来事を見てみますと、路面電車が営業を開始した頃です。仙台白葉が有名になり直行の貨物列車で全国の市場へ高速輸送されるようになりました。市街地には、一番町あたりや国分町に商店街ができ、七夕飾りのコンクールや七夕に合わせた大売り出しも始まりました。それから、1927年7月の平均気温は今より3度くらい低かったようです。

さて、この百年の間に大きな戦争をへて、何度もの大地震や災害、気候変動、コロナ禍もありました。産業や通信が変わり、私たちをと

### 委員長

千葉 マリ（若林地区）

### 副委員長

谷口あゆみ（太白地区）

### 若林地区

中澤 洋之・猪又 隆広

### 太白地区

鈴木 裕一

### 泉地区

千田 道順・澁木 浩明

### 青葉地区

菅原ちえ子・佐藤 久朋

### 宮城野地区

高橋由加里・古関 博子

## 仙台市保護司会連絡協議会

### 機関誌編集委員



### 表紙前扉写真について

昭和100年を迎え、様々な事柄が起きた過去、昭和・平成・令和の変化、昭和20年に起きた仙台空襲（今年戦後80年）では、1、064名の犠牲者が出たそうです。騎馬像はそれよりも10年早く、伊達政宗公没後300年に建立された。初代は1943年戦時中の「金属類改修令」により没収され1962年に二代目の建立となりました。

しかし、初代の騎馬像の胸より上の部分は、奇跡的に残され仙台市博物館近く仙臺緑彩館前に現在残っています。また、騎馬像が取り外された間、白のコンクリート製の政宗公立像が立てられ、今は岩出山城跡に残っています。伊達政宗公は、仙台市内の移り変わる風景を青葉山より見守って来られました。現在では、大きな都市と生まれ変わり、笑顔溢れる街並みとなりました。伊達政宗公も考えられなかった風景になったと思います。この平和な日々が永遠と続くように願うばかりです。

（記述者…若林区 中澤洋之）

### しほれん第29号

令和7年11月1日発行  
発行者 仙台市保護司会連絡協議会

会長 小野 和 徳

〒984-0816 仙台市若林区河原町1-3-24

大和第2ビル304号室

若林区地区更生保護サポートセンター

（若林区地区保護司会事務所）

仙台市保護司会連絡協議会

TEL 022-797-3144

FAX 022-797-3144

しほれん題字 佐々木 啓 治

連絡協議会 馬 場 秀 雄

印刷 印刷ショップドウドウコピー

TEL 022-241-3356

# 「昭和100年」の出来事

昭和元年	大正天皇崩御 昭和に改元	(99年前)
昭和4年	世界恐慌	(96年前)
昭和6年	満州事件	(94年前)
昭和7年	大阪城天守閣再建	(94年前)
昭和8年	満州国を建国	(93年前)
昭和11年	五・一五事件	(93年前)
昭和12年	国際連盟脱	(93年前)
昭和14年	二・二六事件	(89年前)
昭和15年	日独伊の三国同盟が成立	(86年前)
昭和16年	第二次世界大戦勃発	(86年前)
昭和19年	日独伊の三国同盟が成立	(85年前)
昭和20年	真珠湾攻撃	(84年前)
昭和21年	太平洋戦争開戦	(84年前)
昭和22年	昭和東南海地震(M7.9)発生	(81年前)
昭和28年	北海道昭和南山が誕生	(81年前)
昭和29年	東京大空襲 アメリカ軍沖縄上陸	(81年前)
昭和32年	仙台大空襲	(81年前)
昭和33年	広島に原爆投下 長崎に原爆投下	(80年前)
昭和39年	第二次世界大戦終結	(80年前)
昭和43年	昭和南海地震(M8.0)発生	(79年前)
昭和44年	日本国憲法施行	(78年前)
昭和45年	NHK放送開始・奄美群島返還	(72年前)
昭和47年	自衛隊設置	(71年前)
昭和48年	関門トンネル開通	(68年前)
昭和49年	東京タワー完成	(67年前)
昭和50年	東京オリンピック開催	(61年前)

昭和43年	三億円事件	(57年前)
昭和44年	東大安田講堂事件	(56年前)
昭和45年	よど号ハイジャック事件	(56年前)
昭和47年	日本万国博覧会(大阪万博)開催	(55年前)
昭和48年	札幌オリンピック開催	(53年前)
昭和50年	あさま山荘事件	(53年前)
昭和51年	沖縄返還	(52年前)
昭和53年	第一次オイルショック	(52年前)
昭和58年	沖縄海洋博開催	(50年前)
昭和60年	ロッキード事件	(49年前)
昭和63年	第二次オイルショック	(47年前)
昭和64年	成田空港開港	(47年前)
昭和66年	宮城県沖地震(M7.4)	(42年前)
昭和68年	東京デイズニールランド開園	(42年前)
昭和70年	ファミリーコンピュータ発売	(40年前)
昭和72年	筑波万博開催	(40年前)
昭和74年	日本航空123便墜落事故	(37年前)
昭和76年	リクルート事件(政財界の贈収賄事件)	(37年前)
昭和78年	青函トンネル開通	(36年前)
昭和80年	瀬戸大橋開通	(36年前)
昭和82年	昭和天皇崩御 平成に改元	(34年前)
昭和84年	消費税開始3%	(32年前)
昭和86年	日航ジャンボ機墜落事故	(32年前)
昭和88年	佐川急便事件	(30年前)
昭和90年	阪神淡路大震災(M7.3)発生	(28年前)
昭和92年	地下鉄サリン事件	(27年前)
昭和94年	消費税が5%となる	(25年前)
昭和96年	長野オリンピック開催	(25年前)
昭和98年	三宅島噴火	(25年前)

平成16年	オレオレ詐欺が多発	(21年前)
平成17年	JR福知山線脱線事故	(20年前)
平成20年	愛知万博開催	(17年前)
平成23年	リーマンショック	(14年前)
平成24年	東日本大震災(M9.0)	(13年前)
平成26年	東京スカイツリー開業	(11年前)
平成27年	消費税が8%となる	(10年前)
平成28年	慰安婦問題日韓合意	(9年前)
平成30年	熊本地震(M7.3)発生	(7年前)
平成31年	米朝首脳会談で拉致事件解決への道が開ける	(6年前)
令和元年	徳仁天皇上皇に令和に改元	(6年前)
令和2年	京都アニメーション第一スタ	(6年前)
令和3年	ジョー放火殺人事件	(5年前)
令和4年	消費増税10%となる	(5年前)
令和5年	首里城火災	(4年前)
令和6年	中国武漢発新型コロナウイルス	(4年前)
令和7年	新型コロナウイルスの世界的大流行宣言	(3年前)
令和8年	東京五輪強行	(3年前)
令和9年	「西梅田」放火殺人事件	(1年前)
令和10年	第104回全国高校野球選手権大会で仙台育英が初優勝	(本年度)
令和11年	能登半島地震(M7.6)	(本年度)
令和12年	令和の米騒動	(本年度)
令和13年	大阪関西万博開催	(本年度)



「昭和100年」青葉城址からの仙台市内の風景



## 社会を明るくする運動75周年



【伊達武将隊結成15周年 溢れる笑顔と おもてなし】

明るく たくさんの笑顔溢れる仙臺の街並みに